# 令和５年度兵庫県立北はりま特別支援学校 学校評価(職員自己評価）に対する考察

## 1　調査の実施方法、対象者数

本調査は google forms を使用し、オンラインアンケート形式でおこなった。アンケートは 2023 年 12 月 4 日から 12 月 15 日の間に実施した。北はりま特別支援学校本校職員（分布：小学部 36.2%、中学部 32.8%、高等部 25.9%）計 58 名が回答した。

## 2　結果の概要と考察

平均評価は５点満点中 4.1（R4 年度 4.1）と、おおむね高い評価であった。以下、昨年度と比較し大きく変化したもの（前年度比±0.3 点以上）や特に評価の高い/低いもの等、特徴的な項目をあげ、考察する。

### 2.1　評価が大きく上がった項目

**「①児童生徒の発達段階や障害特性を踏まえた環境整備」4.2（R4 年度 3.9）**

児童生徒の実態把握をもとに、習熟度や特性別に学習グループを編成した。また、必要に応じて別室や個別での指導環境や体制を整えた。今後も引き続き丁寧な実態把握と職員間の共通理解に努め、全体で柔軟に対応していく。

**「㉒学校間交流、居住地校交流、校内交流、及び協働学習の推進」4.2（R4 年度 3.5）**

新型コロナウイルス感染症の５類移行にともない地域や他校との交流を充実させることが出来た。事前に丁寧な打ち合わせをおこない、交流先の目的も理解したうえでの実施に努めた。また、本校児童生徒の障害特性を知ってもらうために相手校への事前学習を積極的におこなった。

### 2.2　評価が大きく下がった項目

**「⑥安心して自己表現し、他者と協働して学べる場の保障」3.7（R4 年度 4.1）**

今年度はなかよし会（児童生徒会）の行事も対面でおこなうことが出来た。しばらく実施していなかったり、形態を変更していたりしていため、試行錯誤の様子が評価に反映されたのではないか。

**「⑳教職員の専門性資質及び指導力の向上」3.7（R4 年度 4.2）**

全体の研修テーマを「自立活動の指導の在り方」とした。その上で学部ごとに具体的なテーマを設定し、研修をおこなった。３月末には全体実践報告会を予定している。各学部に分かれたことで、取り組み方に差が生じたことが課題である。

### 2.3　比較的評価が高かった項目

**「②定期的、日常的な安全点検の実施」4.4**

月一度の安全点検を継続して実施し、職員が施設、設備の安全面に意識を向けることができていたといえる。また、修理、補修については、事務室等と共有し、環境整備を進めることができた。

**「④命を守る防災教育の推進」4.4**

地震の際の安全確保行動が身に着けられるよう、シェイクアウト訓練を導入した。今後も継続したい。訓練の前にはスライドを活用して事前学習に取り組んだ。また、PTAと連携して、学校保管の非常食や水の補充・入れ替えを年２回おこなうことが出来た。

命を守る防災教育推進のために火災と地震をテーマにした体験学習を取り扱うようにすれば、児童生徒に負担なく実施できるのではないか。

**「㉔服務規律の確保及び綱紀粛正」4.4**

職員朝礼や職員会議等、機会あるごとに情報を共有することができた。特に非違行為は県教委の記者発表等、直近の新聞記事を取り上げることにより、より身近なものとして感じられる工夫をして啓発ができた。

## 2.4　比較的評価が低かった項目

**「⑦自分も相手も尊重する心を育てる教育活動の実施」3.8**

今年度は、すべての授業案に人権に特化した目標を記入し、相手の気持ちになって考える想像力や共感力を意識した授業づくりに取り組んだ。子どもたちにとって、学校が安心して主体的に活動できる場所になることを目指した。児童生徒の変化を感じるまでにはもうしばらく継続して取り組む必要があると考える。

**「⑩互いに思いやり、何でも相談しやすく、助け合える学校組織」3.8**

児童生徒に関することは、クラス担任全員で関わるようにした。また、クラス会の内容は学年会で共有するようにし、全体での周知を図った。また、担任が生徒や保護者対応で苦慮している場合は、支援部の協力を得るようにした。

次年度に向けて、普段から毎日の児童生徒の様子、連絡帳の内容など、些細なことでもクラス間で情報共有する意識をもつ。また、学部全体で児童生徒一人一人の指導に関わる。気付いたことは、学年、学部を超えて話し合う。

**「㉕教職員の勤務時間の適正化」3.8**

毎週金曜日に定時退勤日、月に１度完全消灯日を設定した。退勤チェックシートを活用し、職員の意識改革を図った。行事月には変動があるものの、少しずつ改善の傾向がみられた。しかし、職員間の情報共有の必要性もあり、合間を縫って会議や研修を入れる状態がある。職員の意識改革と併せて、行事や会議等の持ち方の検討も随時進めていく。

## 3　来年度へ向けて

児童生徒の将来を見据え、社会とのつながりを築いていくためにも地域との交流・協働の推進が期待される。また、本校は高校支援及び地域支援のセンター的機能を担っている。交流啓発活動の意義や本校の役割を全職員に周知するとともに、活動継続の仕組みを構築していく。これらの取組が児童生徒にとって主体的で、自己有用感を育む活動となることを常に意識する。

# 令和５年度兵庫県立北はりま特別支援学校訪問学級 学校評価(職員自己評価）に対する考察

## １　調査の実施方法、対象者数

本調査は google forms を使用し、オンラインアンケート形式でおこなった。アンケートは 2023 年 12 月 4 日から 12 月 15 日の間に実施した。北はりま特別支援学校きずな訪問学級・のぎく訪問学級職員計６名が回答した。

## ２　結果の概要と考察

平均評価は５点満点中 4.8（R4 年度 4.3）であった。職員数が少ないことを考慮に入れて考察する必要はあるが、おおむね高い評価となった。以下、昨年度と比較し大きく変化したもの（前年度比±0.3 点以上）や特に評価の高い/低いもの等、特徴的な項目をあげ、考察する。

### 2.1　評価が大きく上がった項目

**「①衛生管理・健康管理に努める」5.0（R4 年度 4.7）**

新型コロナウイルス感染症の５類移行後、医療福祉センターでも面会制限が緩和された。制限の緩和により人の出入りや接触の機会が増えたため、一層の感染症対策に留意した。今後も新型コロナウイルス感染症対策の経験を活かし、衛生管理・健康管理の意識を高く維持する。

**「②安全教育の徹底に努める」4.8（R4 年度 4.5）**

摂食や発作等、健康面における情報や、児童生徒の安全に配慮する事項に関して施設職員と共有、連携しながら教育活動をおこなうことが出来た。今後も施設職員から助言を受けながら、指導時の安全確保の知識や技能を高めていく。

**「⑤障害のある人に対する理解啓発に努める」4.2（R4 年度 3.7）**

４年ぶりに施設外での行事が再開し、障害のある人に対する理解啓発を図る直接的な機会を持てるようになった。また、間接的な交流としては、北はりま特別支援学校ホームページ内のブログに活動の様子を掲載し、情報発信ができた。次年度もホームページを中心に、広く情報発信をすすめ、障害がある人への理解啓発に努めたい。

**「⑮本校や施設、地域社会との交流を深める」4.8（R4 年度 2.7）**

昨年度と比較し、2.1 点と高い上昇率を示した。本校へのスクーリングを再開できたことが主な理由であると考える。さらに、スクーリングの前のオンライン交流により、訪問学級の様子を本校の児童生徒に伝えることもできた。

医療福祉センター施設内では、サツマイモの収穫や調理の体験を通して交流を重ねた。また、儀式的行事に参列していただくなど、センター職員・入所者の方々との交流を深めることが出来た。今後もセンターと連携して継続的に交流活動を実施していく。

### 2.2　評価が大きく下がった項目

**「⑫各種研修会や研究・公開授業を通して実践的指導力や専門性の向上を図る」3.0（R4 年度 4.2）**

昨年度は兵庫県特別支援学校知的障害教育研究協議会・近畿特別支援学校知的障害教育研究協議会訪問教育部会で運営と実践発表を担当した。今年度も参加し、情報交換をおこなうことは出来たが、実践発表の機会がなかったため、受け身の研修であったと感じる。

### 2.3　比較的評価が高かった項目

**「⑭広報活動の推進を図り、積極的な情報公開・発信を実践する」4.8**

ホームページや連絡帳等で情報を細やかに伝えることで保護者との信頼関係を保持することが出来た。今後は連絡アプリ等、より確実で効率的な方法を導入していく。

### 2.4　比較的評価が低かった項目

**「⑥特別支援学校としての人権教育体制の確立に努める。4.2**

教師は言葉かけをする際に、児童生徒の生活年齢を意識し、年齢に応じた表現をするよう心掛ける。また、児童生徒が主体的に学習できるよう支援方法や授業展開を工夫する。

## 3　来年度へ向けて

数年間の新型コロナウイルスの対応で培ったノウハウを今後もあらゆる感染症対策に活かせるよう継承していく。ICT 機器の活用をさらに発展させ、医療福祉センターの外の世界を子どもたちに体験させる。また、地域や他校とつながる活動を推進していく。